

テキスト 『ベートーヴェンの生涯』 片山敏彦訳

二〇一六年三月二十六日(土) 午後二時―四時 作成 清原章夫

今月の音楽

一・ベートーヴェン(独・一七七〇～一八二七年)

ドレスラーの行進曲による九つの変奏曲 WoO. 63 (WoO: Werke ohne Opuszahl 作品番号なしの作品は、一九五五年にキンスキーとハルムによって編集された。作品番号は一三八まであり、作品番号なしは二〇五曲が収録されている。)

(一) 演奏 ルドルフ・ブッフビンダー…ピアノ(演奏時間…約十五分)

(二) 曲目解説 少年ベートーヴェンが十一歳だった一七八二年中頃に作曲した、現在知られている限り、ベートーヴェンの最初の作品であり、初めて出版された作品でもある。

このころ彼はネーフェ(一七四八～一七九八年)に師事して本格的な作曲を学んでいた。そのネーフェの勧めと援助によって、一七八二年末から一七八三年の初めにマンハイムのゲッツ社から三十六クロイツァーの価格で出版された。

ネーフェは一七八三年三月二日号の『音楽雑誌』に匿名で、「ケルン選帝侯国の音楽事情」という記事を書いた。

「・・・ルイー・ヴァン・ベートーヴェンは先に述べたテノール歌手の息子で十一歳の少年。前途有望な才能の持ち主で、クラヴィーアを上手に力強く演奏し、・・・現在ベートーヴェンは作曲の勉強をしており、彼を励ますためにネーフェ氏は行進曲をテーマとするクラヴィーアのための九つの変奏曲を出版させた。この若き天才は、留学のための援助をうける資格がある。最初と同じくたゆまず進歩を続けるなら、必ずや第二のヴォルフガング・アマデーウス・モーツァルトになるであろう。」

ドレスラーは作曲家としてより優れたテノール歌手として、ヴィーンとカッセルで活躍した。一七五五年以降、カッセルの宮廷歌手になった。作品はほとんど残っておらず、ベートーヴェンが用いた行進曲の原典は不明である。

初めての作品が、ベートーヴェンのあらゆるジャンルにおいて重要な意味をもつ変奏曲であることは象徴的である。また、変奏曲は作曲の語法であるだけでなく、即興演奏の重要な技法であることも忘れてはならない。ベートーヴェンは最初、作曲家としてよりも優れたピアニストとして活躍していたのである。

さらに、彼にとつて『運命』を表す調性となる(ハ短調)であったのは何を意味するのだろうか。もちろん、当時のベートーヴェンはまだ耳の病気が発症しておらず、人生の苦悩など知らなかったもので偶然に選んでしまったのだろうか。

そして、ハ短調で始まった主題がハ長調で終結する構成は、その後『悩みをつき抜けて歓喜に到れ!』という思想を表した、同じハ短調の交響曲第五番『運命』や、弦楽四重奏曲第四番、ピアノソナタ第八番『悲愴』、最後のピアノソナタ第三二番まで生涯をとおして、繰り返し用いられることになる。



現在確認されている最年少のベートーヴェン肖像画(13歳)



ホルネマン作 象牙の細密画(1803年、33歳)
ベートーヴェン自身が気に入っていた肖像画

Der Gräfin Felice von Wolf-Metternich gewidmet

Neun Variationen

über einen Marsch von Ernst Christoph Dressler

Ludwig van Beethoven, WoO 63
Komponiert 1782

Thema

Maestoso

Var. I